

るようになった。

リーチは東北や韓国でもカメラを回したが、内容の調査は今後の課題だ。特定できない場所もあるため、民家の屋根の形などを手かりに調査を進めたい。リーチの興味は広く、陶芸だけでなく、和紙、織物、人形、こけしや将棋の駒の制作の様子もフィルムに収めている。

昨年、「民芸運動フィルムアーカイブ制作委員会」を設立、映像資料の修復やDVD化を進めるための活動を始めた。また、アーカイブの一部を見ていただくことを考えて、東京・有楽町の「無印良品 有楽町 A T E L I E R M U J I」で

映像や写真、資料を上映・展示する展示会を3月26日まで開催中だ。小鹿田の坂本さんはかつて焼きものを背負って村々を歩き、物々交換で豆や米などと交換したそう。民芸は生活に根ざした「用の美」である。その魅力を日本だけでなく、世界の人にも知ってもらえるように、ますますアーカイブを充実させたい。(映画監督)

有楽町で上映・展示

映像や録音を提供した

いと申し出てくださる方も現れた。自分で撮影したインタビューなども加えると、現在アーカイブは30時間分ほど。デジタル技術の発達で昨日撮影したような鮮やかさで見えがえらせることもできる。(映画監督)

「城」に住みたいという願いが込められたと聞き、胸が熱くなった。厨子麴を知る人は沖繩でも少なくなつたという。

年)や、戦後にリーチが再来日した際の映像などが次々見つかった。これらの撮影地を訪ねて関係者に取材し、新たな映像や音声資料として制作するようになった。小鹿田の陶工、坂本茂木さんとは長い付き合いになった。17歳の坂本さんは54年に撮影された映像にリーチや柳とともに登場している。30代後半で私の作品に出てくれた。昨年、80歳の彼と再会。昔の映像を見ながら陶器を制作して米俵で梱包するまでの解説を録音・録画させてもらった。沖繩では、浜田や河井寛次郎が作陶した新垣栄世さんの工房へ。「琉球の民芸」を見た親類の職さんがこんな話をしてくれた。職人がつくる建物を模した陶器は「厨子麴」と呼ぶ骨つば。「沖繩は昔、貧乏だったからねえ」。せめてあの世では

かんた。フィルムには音声がなく、内容に関するメモ類も残されていない。参考となる資料を探そうち、日本民芸館が企画制作した短編「琉球の民芸」(39

高輪のリーチとは長時間の会話はかなわなかった。しかし、常滑と沖繩の窯元で数カ月間ずつ陶芸を学んだ私の体験談に熱心に耳を傾け、別れ際にフィルムを預けるとまて言ってくれたのだ。

録したフィルムが存在するならば、この目で見てみたい。すぐに英国セント・アイヴスの工房に電話をすると、リーチ夫人のジャネットが応対してくれた。75年、私はリーチに会うため、海を渡る。視力を失いつつあった

かわったリーチの著書を読んだのはそのころだ。そこには彼が日本で撮影した16ミリフィルムのことや書いてあった。撮影地を再訪して上映したころ、地元の人々が大喜びしたという。戦前の日本の工芸を記

した民芸運動の指導者、柳宗悦の姿もある。カナ夕出身の私がリーチから直接、このフィルムを譲り受けたのは偶然の導きだったといえる。

22歳で陶工見習い、70年、22歳の私は日本の伝統工芸と芝居にひかれて初来日。縁あって愛知県常滑市の窯元で数カ月間、陶工の見習いをしてもらった。どんな小さなことでも吸収しようと、あらゆる手伝いを買って出て、夜と週末は一人口クロに向かった。職人の暮らしぶりに触れた体験をもとに5年後、大分県日田市の小鹿田焼の窯元などを取材して「陶器を創る人々」という短編ドキュメンタリーを制作する。民芸運動にか

民芸の息吹 焼きつけた

◇英国人陶芸家の遺志継ぎ、ドキュメンタリー制作◇

マーティ・グロス



ろくろを回す浜田庄司 (1934年)

陶芸の里として知られる栃木県益子町などを撮影した、1934年の古い16ミリフィルムがある。茅葺き屋根の民家の軒先で職人が陶器の絵付けをし、陶芸家の浜田庄司がろくろを回す。掘りだした土を運ぶ馬の姿も見える。34年から翌年にかけて日本を訪れた英国の陶芸家バーナード・リーチ(1887~1979年)が自らカメラを回して撮影した映像だ。

計5本で70分ほど。益子のほか東北、京都や松江などで撮影され、同行